

コザ暴動とは

1970年12月20日未明 沖縄県民に対して、米軍人が人身事故を起こしMP(ミリタリーポリス)が対応したが、その対応に不満を持った地域住民が抗議を行ったのに対して威嚇発砲(人に向かってではない)を行った。これをきっかけに、暴徒と化し最終的には米軍登録車両84台を焼き討ちにする事件へと発展した。1945年の終戦から続く米軍による統治に対し鬱積していた不満が噴出した形となり、戦後最大の民衆事件となった。米軍側は、おとなしく平和的な性質と思っていた沖縄の人がこのような形で暴動を起こした事は大きな衝撃だったとも言われており、その後の沖縄本土復帰の際にも、この事件は大きく影響を与えた。

ただし、事件に便乗して民間人の車両に害を与えたり、略奪や傷害事件が無かった事や先導する者がいなかったなど、計画的な暴動ではなかったが、対象が米軍登録車両のみに徹底していたという事で、秩序ある暴動とも言われている。

事件への背景

コザ市(現 沖縄市)は米軍嘉手納飛行場と陸軍キャンプを抱え、米軍人・軍属相手の飲食店、土産品店、質屋、洋服店が立ち並び、市民には基地への納入業者、基地建設に従事する土木建築労働者、基地で働く軍雇用員も多かった。事件当時はベトナム戦争の最中で、沖縄を拠点に活動していた米軍関係者の消費活動は著しく、市の経済の約80%は基地に依存、産業構造は第三次産業に著しく偏向し、特に米軍向け飲食店(Aサイン)は「全琉のほぼ3割を占める286軒」が集中していた。このような経済的助力を受けながらも、沖縄の間には施政者である米軍に対する不満が鬱積していた。その最たるものが米軍人・軍属による犯罪とそれに対する処分の不十分さである。

毒ガス漏洩

米軍はベトナム戦争用の兵器として、コザ市に隣接する美里村(現沖縄市)知花弾薬庫などに致死性の毒ガス(主要成分はイペリット・サリン・VXガス)を秘密裏に備蓄していたが、1969年7月8日ガス漏れ事故が発生、軍関係者24人が中毒症で病院に収容されたことが同月内に米ウォールストリート・ジャーナルの記事で明らかになった。米国外での毒ガス備蓄は沖縄のみで、周辺住民は事故の再発におびえ、島ぐるみの撤去要求運動が起こった。

糸満れき殺事件

上記のように米兵の不法行為について法的に保護されない中、沖縄人は事件発生のたびに団結し示威行動で処遇改善を要求するしかなかった。1970年9月18日に糸満町(現・糸満市)の糸満ロータリー付近で、酒気帯び運転かつスピード違反の米兵が歩道に乗り上げて沖縄人女性をれき殺する事故を起こした。地元の青年たちは事故直後から十分な現場検証と捜査を求め、現場保存のため1週間にわたってMPのレック一車を包囲し事故車移動を阻止した。また地元政治団体とともに事故対策協議会を発足させ、琉球警察を通じて米軍に対し司令官の謝罪・軍法会議の公開・遺族への完全賠償を要求した。

暴動発生の月

糸満れき殺事件で1970年12月7日に軍法会議は、被害者への賠償は認めたものの、加害者は証拠不十分として無罪判決を下した。沖縄人の多くがこの判決に憤り、12月16日に糸満町で抗議県民大会が開かれた。さらに暴動前日の12月19日には、美里村の美里中学校グラウンドで「毒ガス即時完全撤去を要求する県民大会」(上記の糸満事件無罪判決に対する抗議も決議文に含む)が開かれ、約1万人が参加した。その参加者が集会終了後に、またそれ以外の市民および周辺市町村住民も忘年会などを目的に、事件発生場所に隣接する中の町社交街に多数集まっていた。

事件の翌朝に取られた写真



鎮圧にあたる警察官と燃え盛る車両



ひっくり返され焼かれたMP車両



対象となっていたナンバープレート(イエロープレートと呼ばれた)



被害を受けた車両の分布図(現在、国道 330 号線 山里三叉路から胡屋十字路付近まで)



以上